
優しい風が吹く季節に

川越ふみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優しい風が吹く季節に

【Nコード】

N0502K

【作者名】

川越ふみ

【あらすじ】

来年、成人式を向かえようとしている主人公の成瀬結^{なるせゆい}。結はある過去を背負いながら、それをキツカケに様々な人達と出逢っている。結は「大人とは」を自問自答する。そして1年後の成人式の日には、結はどんな大人になっているのか。そして結の出したその答えとは。。。

第1回（前書き）

第25回新風舎出版賞、最終選考落選作品（笑）

第1回

俺の部屋のテレビは、成人式の式典で市長のスピーチの最中に暴れて騒ぐ20歳の男達の姿がニューズ映像として流され、取り上げられていた。

お前の話が長げーからこうなんだよ。そもそもお前の話なんか誰も聞きたくねーし、誰も聞いちゃいねーんだよ。

そんな事を思いながら、ニヤリと、男達が次は何をするのかと画面を観ていた。

「この子達は大人になりきれしていない子供ですよ」

画面はスタジオに戻され、その際映し出された何かの肩書きが付いたおっさんが、静かに笑いながらそんな事を言っていた。

「じゃー、大人ってなんだよ・・・」

俺は小さく口に出してそう呟いていた。

今日は成人の日だ。そして19才の俺は、来年成人の日を迎える。去年、高校を卒業したが、就職活動をする訳でもなく、自らフリーターの道を選んだ。何かやりたい事や夢がある訳じゃない。むしろそれとは逆に、やりたい事がなく、夢がないだけだ。

「キエチマエ・・・」

俺はそう言葉にしながらテレビのリモコンの電源のスイッチを押した。うざったいおっさんの姿が消え、テレビ画面が暗くなると、その画面のガラスに反射し、今度は自分の顔がうつすらと写し出され、俺は自分の姿から顔をそらした。

ビデオデッキの時刻を現しているデジタルの数字は、『19:03』を示していた。

トットトットトットと、自分の部屋のある2階へと小走りで階段を上がってくる足音が部屋のドアを隔てて聞こえてきた。

俺は立ち上がり、扉の方へ向いた。

ガツチャツつと部屋の扉が開かれ、母親が顔を覗かせた。

「あつ、結ゆい、ごはん。降りてきて」
「.....」

足音が母親のものである事、そして夕食を呼びに来るものである事は直ぐに分かった。時間的にもそうだし、何より母親が2階の俺の部屋を訪れるのはその時だけだからだ。

俺は部屋を出て扉を閉めると、気だるく階段を下りて行った。

父親は単身赴任で月に何度かしか家には帰って来ない。しかし、それは俺にとっては好都合な事だった。

キッチンには、いつものように2人分の食事が用意されていた。母親といえば、俺にリアクションするでもなく、キッチンに備え付けられているテレビに夢中になっていた。

そんな母親を横目に、自分の分の食事を食べ始めた。うまい、まじいはどうでもいい。ただそこにある物を片付けるだけ。そんな食事が終わると、再び自分の部屋へと階段を上がって行った。

俺は何もしていない訳ではない。一応バイトはしている。それは郵便局の仕分けのバイト。そのバイトを選んだ訳は単純な事で、人と関わらなくてよさそうなバイトだと思ったからだ。週に2、3回出ればよく、特に仕事のノルマはないから、自分のペースで仕事ができる。それもそこを選んだ理由の一つだ。年末年始だけの期間限定で、年賀状の仕分けを主としてのバイトで入った。まー、『金がない』それだけの理由で、仕方なしにバイトをしているのだけの話だが.....。

第1回（後書き）

第2回へ続く・・・

第2回（前書き）

第25回新風舎出版賞、最終選考落選作品（笑）

第2回

21時を廻り、出掛ける支度をする、自転車で郵便局へと向かった。郵便局へは決まった同じコースを自転車で必ず行く。そしてそれが意味日課のようになっていた。

郵便局には裏口から入る。特に入局許可証などはなく、そこには警備員も居ない。入ろうと思えば誰でも入れる環境だった。

一度3階へ上がり、バイトの待合室に荷物を置くと、主な仕事場である2階へと下り、タイムカードを押した後、毎回変わる役割分担表から自分の名前を探し出し、そこに判を押す。そして仕事前の郵便局員の決まった挨拶の後、名前を呼ばれて返事をすればそれで良い。バイトの人数は20人程いる訳だから、他の誰かにタイムカードを押してもらい、他の誰かに自分の判を押してもらい、他の誰かに返事をしてもらえば、当の本人が居なくてもバイト料がもらえるといった可能性が無い訳ではなかった。すなわち、他の誰でもよく、俺でなくてはならない理由などどこにもないのだ。

今日の役割分担表の自分の名前は、小型郵便の所にあつた。といっても、小型郵便と大型郵便のどちらかなのだが。仕事内容もさほど変わりなく、どちらが良いというものもなかった。仕事時間は21時30分～5時30分。内、0時～1時までは休憩時間となり、実質の労働時間は7時間だった。

21時35分、郵便局員の挨拶が終わった後、俺を含めたバイト達は、それぞれの持ち場へと移動し、作業を開始する。周りの連中はもう知った顔だが、名前は誰一人と知らない。当然、あちらも俺の名前など知る由もないのだろう。しかしそれでも仕事が成り立つのだから笑える。

仕事は腹が立つ程単純で、郵便物の郵便番号別に仕分ければいいだけ。ただそれだけだ。作業が退屈なだけに、時間が過ぎるのがとても長く感じる。わずか一時間の間に、郵便局内にある掛け時計を

いったい何十回と見ていただろうか。

第2回(後書き)

第3回へ続く・・・

第3回（前書き）

第25回新風舎出版賞、最終審査落選作品（笑）

第3回

作業を始めて約2時間半、時計が0時を示し、日付が変わると同時にようやく一時間の休憩に入るといふ指示が出た。どうでもいい話だが、今年の1月1日の年越しの際も、このように何もなかったかのように新年を迎えた。それは、この空間だけが世の中と隔離されているかのような感じでもあった。かといって、新しく年を迎えるという事自体、俺には興味のない事なのだが……。

バイト達は0時からの休憩時間の指示が出ると、各々3階の待合室へと移動する。待合室には、いくつかのテーブルと、それに合うだけのパイプ椅子、それに6畳程の畳が敷かれたスペースもあり、そこにはテレビが一台備え付けてあった。その畳のスペースには、いつも古株のバイト連中が陣取っていた。どこに席を取っても良いのだが、なんとなく、それぞれのテリトリーは決まっていた。俺の場所も大体決まっていて、バイトに来る際、自分の荷物を置いたその場所に腰を下ろした。

休憩時間は1時までの1時間だが、飯を食う者、連れと雑談する者、テレビを観る者、寝る者と、それぞれ好きな事をして過ごす。俺は飯は食わず、家から持参した小説を読んで過ごした。小説は、この一時間に限らず、家に居る時も好んで読んでいた。それは自分にとって、唯一『趣味』と呼べる物だったのかもしれない。かといって様々の分類のものを読んでいく訳ではなく、ミステリーにしか興味がなかった。ましてや他の種類のものを読みたいとも思わなかったし、読んだ事もなかった。それを読んでいる間だけは、その世界と自分が溶け込み、この世界を忘れる事が出来る、すなわち安らげる瞬間だった。

周りの連中が席から立ち上がるのが視界に入り、ハツとして部屋の置き時計に顔を向けた。時計の針は『0時57分』を示していた。それを確認すると、自分のバックに小説をしまい、俺は2階へと階

段を下りて行つた。階段を下りながら、そういえば、待合室に入つて部屋の置き時計を見たのはその時が始めてだったと、その時そう思った。

休憩が終わる1時には、特にその事を告げるチャイムなどなく、そして点呼などもない。ただ、各自が1時に作業を再開するという形になっていた。そう、それは俺一人いなくとも、間違いなく何事もなく時が過ぎる事を暗示していた。そして俺は常日頃その環境に疑問を抱いていた。出勤の際の事も当然そうだが、この局内の全てにおいて危機管理がないという事をだ。別にここの郵便局を心配している訳ではない。むしろどうなるうと俺には構わない。ただ、『所詮アルバイトだろう』となめられている様で腹立だしかつた。

それからの5時30分までの4時間30分は、苦痛でしかなくかつた。それは今日に限つた事ではない。毎回その苦痛を味わう為にここに来ていると言つてもいいだろう。苦痛と引き換えに金をいたたく。それは言い過ぎでもなんでもないような気がした。

5時30分に仕事を終了し、帰宅する際に決まつてする事がタイムカードを押す事。自分のタイムカードにズラーと並ぶ同じような数字の列に、無性に腹が立つた。このバイトを始めて約一ヶ月経つが、こんな風に思つたのは今日が始めてだった。その答えは自分でも分かつている。その一ヶ月で蓄積されたものが自分の持つている器の量の限度を超えてしまつたのだらう。それが今日という日。その器から溢れ出た何かが、俺の心の奥底にあるスイッチを押してしまつた。きつとその時がそうだったに違いない・・・

第3回(後書き)

第4回へ続く・・・

第4回（前書き）

第25回新風舎出版賞、最終審査落選作品（笑）

第4回

次の日の夕飯の際、いつものようにテレビを観ている母親は、俺のバイトがある日を把握していない。正確には、母親は俺が毎日バイトに行っていると思っっているに違いない。それは毎日決まって俺が21時過ぎに外出するからだ。しかし、バイトがあるのは週に2、3回程度で、後の日はバイトがなかったが、バイトがない日でもバイトのある日と変わらず21時過ぎに家を出ていた。そうする事が、俺の中での決まり事だった。

バイトのシフトは月単位で決まっっていて、前の月に自分がスケジュールを決め、その用紙を提出する。週に2回以上出なければいけないという決まりはあるものの、シフト自体は、ほぼ自分の決めた通りに組まれた。

俺は適当に食事を済ました後、部屋で支度をし、外出すると、いつものように決まったコースを自転車で通り、そしてバイト先の郵便局へと到着すると、そのまま局内へと入って行き、数多くの郵便物が置いてある2階へと階段を上がった。そして誰も居ない事を確認すると、一つの小包に目を止め、辺りを見回し、もう一度誰も居ないことを確認すると、それを右手で抱えた・・・。

さき程のように、局内へと入ってきた順路を引き返すと、俺は郵便局を出た。そして小包を自転車のカゴに放り投げると、全力疾走で自転車を飛ばした。それは自分のやった行為が怖くなったからじゃない。やってやったと思ったからでもない。言葉では表現出来ない、その時は、自分自身どうしたいのか分からない感情だった。

今日のバイトの役割分担表に俺の名前はなかった・・・。

第4回（後書き）

第5回へ続く・・・

第5回（前書き）

第25回新風舎出版賞、最終審査落選作品（笑）

第5回

次の日、複雑な心境でバイト先に向かった。いつものようにタイムカードと役割分担表の自分の名前の所に判を押す。そしていつもの仕事前の郵便局員の挨拶。全て普段通りに事が進み、俺は作業を始めた。ただ違うのは、その時、俺は顔がニヤけるのを必死に押さえていた事だろう。

休憩時間に入る0時までの退屈な2時間半を乗り越え、俺を含めたバイト達は待合室へと移動した。いつもの俺なら椅子に腰掛けるなり小説を読み始めるが、その日は、椅子に腰掛けたままただボーとしていた。別に疲れた訳ではない。次に起こそうとしている事に対して考えていただけだった。そう、俺の考えに間違いはない。そしてそれを今から証明してやる、と……。

あつという間に時刻は0時57分を過ぎ、バイト達は仕事を再開する為、2階へとそれぞれ階段を下って行った。それを尻目に、俺は2階を通過し、更に1階へと階段を下りて行った。そしてそのまま郵便局の外に出ると、暗闇の中を自転車で駆け抜けた……。

5時25分、そろそろだろうと再び郵便局に戻り、局内へと入ると、2階へと階段を上がった。5時30分にはまだ2、3分ある。

俺は2階の部屋の扉の前で身を潜め、頃合いを見計らった。

5時30分、扉を隔て、少しだがざわめく物音が聞こえたのを確認し、俺は扉をそつと開けると、そこにはバイトの連中がタイムカードを押している、いつもの5時30分の風景があった。俺はそいつらに紛れ込み、自分のタイムカードを押すと、家へと自転車を飛ばした……。

翌日もバイトが入っていたが、構わずシカトした。その次の日も、

更に次の日も。そしてあれから郵便局を訪れる事は二度となかった。

第5回（後書き）

第6回へ続く・・・

第6回（前書き）

第25回新風舎出版賞、最終審査落選作品（笑）

第6回

あれから何日かしたある日、郵便局から俺宛に手紙が届いた。早速中身を開けると、それは無断欠勤が続いた為の解雇の知らせだった。なんとなく予想はついていたし、何も驚くような事はなかった。それにあちらからの解雇とあるが、俺から言わせれば、こちらから辞めてやったんだ、という腹立たしい気持ちだった。

それから何をやるでもなく家に居たが、毎月来るはずの郵便局からのバイトの明細書が来ない事を母親は不思議に思ったのか、その事を俺に問いただした。俺は「バイトの期限が切れた」ただそれだけを言うと、元々短期間のバイトとして入った為、母親は黙って納得し、更に問いただす事はしなかった。

俺はあの2日間、バイト先の危機管理の甘さを証明するつもりであの行動を起こしたが、なぜか何ともいえない複雑な心境に陥っていた。もちろん、やってやったという気持ちもある。しかし、2日目のあの時間は、確実に俺が居なくとも仕事が成り立っていた。そして誰一人として俺が居ないという事実、すなわち、俺の存在に気がついていなかったという事になる。俺はいつたいなんの為に生きているのだろうか。こんな事を思ったのは初めてだった。そんな自分が悔しくて、俺は拳を部屋の床に叩き付けた。

「チクシヨウ」

『チクシヨウ』あの時以来、この言葉は口癖の様になっていた。そしてこの言葉を口にする度、その時の記憶を思い出す――

第6回（後書き）

第7回へ続く・・・

第7回（前書き）

第25回新風舎出版賞、最終審査落選作品（笑）

第7回

「一昨年の10月、高3の18才の俺は、学校終わりに行っている予備校の帰り道、いつものコースである河原の土手を自転車で走らせていた。21時を廻っていた為、辺りはとても暗かった。

「前に誰か居る！」そう思ったと同時に急ブレーキをかけた。

「危ねーなー！」そのような言い回しの太い2種類の男の声。

その言葉に腹が立った俺は、とっさにこう言った。

「お前らが突っ込んで来たんだろーが」

「あん？ちよつと来いよ！」

男2人組はそう言うのと、俺の二の腕辺りのシャツを掴み、土手を下った芝生のスペースに引きずり込んだ。と同時に片方の男に背後に廻られたかと思うと、腰の辺りに激痛が走った。その痛みからして蹴られたという事は理解出来たが、後はどうする事も出来ず、そこにうつ伏せに倒れ、奴らに何発も蹴られ続けた。その時、俺は必死に両腕で自分の頭を押さえ続けた。その時自分の頭の何処かにあった、『頭だけは守らなければ』という知識があったからだろう。すなわち、その時確実に『死』を意識した。

そいつらの風貌、口調から、俺と同年か、もしくは少し年下といった印象だった。そんな事位しか警察には伝えられなかった。。。

「チクシヨウ・・・」

俺は2人組が去り、静まり返った真つ暗な土手にうずくまり、独りそう呟いていた。。。

それから何時間経ってからだろうか。俺はゆっくり立ち上がると、土手を登っていった。すると、そこにあるはずの自分の乗って来た自転車がない事に気がついた。奴らの目的はその自転車にあったのではと思考しながら、ジーパンの右後ろのポケットに触れると、またそこにあるはずの財布もなかった。。。

その後、自力で歩いて家に帰ろうとしたはずなのだろうが、気がつくと走る救急車の中だった。どうやらあれから意識を失ってしまったらしい。そしてそんな自分に腹が立った。

「おっ！気がついたかい？」

白いヘルメットをかぶった男が俺に話しかけている。俺はその問いに無言でいると、救急隊員だろうその男がこう続けた。

「君は気を失っていたんだよ。どこか痛む所はないかい？」

そう言われ、そういえばと奴らに蹴られた腰に意識がいくと、思い出したかのように腰の辺りに激痛が走った。

「！！」

俺は声さえをあげなかったものの、顔を激しく歪ませた。

「あー、大丈夫かい！？今はあまり動かない方がいい。後は私達に任せなさい」

構わないでくれ！そんな偽善ぶった男の言葉に、俺は腹が立った。診察の結果、左の腰辺りの骨にヒビが入っており、全治2ヶ月の重症だった。歩けない程ではないが、腰を曲げる事はおろか、歩く度に左の腰に激痛が走った。

診察結果が出ると、医者や親は入院を勧めたが、俺はそれを拒否し、家に戻ると、それからいつもと変わらず学校にも通った。仮に病院や家で療養生活をしながら受験勉強をしたとしても、この時期なら単位などに影響はなさそうだったが、自分自身、それは許せないものがあつたし、何より、こんな状態の自分を認めたくなかつたというのがあつたからだ。

その間にも今回の事での被害届を警察に出し、事情聴取などを受けたが、警察官の事務的な対処が腹立たしく、こんな所に来なければと後悔もした。

俺はそれからというものの死にもぐるいで勉強をした。一日の生活は、学校の授業を含めて、勉強をしているか寝ているかの2つだったと言っても言い過ぎではなかっただろう。

合格発表の日、特にいつもと変わらずの朝を迎え、発表会場であるその大学にも淡々と電車で向かった。最寄りの駅で降り、校舎までそこから歩いて行った。そして掲示板の前までやって来ると、自分の受験番号と掲示板の番号を照らし合わせた。

『大学受験に失敗する』そんな事は自分の頭の何処にもなかった。。

俺はかなりの間、そのの掲示板の前で立ち尽くしていた。

意味がよく分からない。俺は何も間違っていない。あんなに必死に頑張ったんだ。なのに、なのに．．．あいつらだ。あいつらが俺を狂わせたんだ。何もかもあいつらのせいなんだ。そうだ、そうだよ、そうに決まってる！世の中平等でいかなきゃ．．．殺してやる。殺してやるよ！今度は俺があいつらを狂わせてやる！！

俺は掲示板に背を向け、全速力で駆け抜けた！

第7回（後書き）

第8回へ続く・・・

第8回（前書き）

第25回新風舎出版賞、最終審査落選作品（笑）

第8回

それからもう一年以上の歳月が過ぎた。警察からは一度たりともその事に対する連絡が来る事はなく、奴らの手掛かりはいっさい分からないうままだった。しかし、奴らに対する強い憎悪に変わりはなく、それ所か、その時以上にその感情が増幅していつている事に間違いはなかった。そしてその時の強い気持ちと共に、郵便局でバイトをしていた当時から、バイトを辞めた今でも、21時を廻ると家を出て、あの土手へと自転車を走らせる。悔しいが、この一年間、もう一度奴らに遭遇する手立てはそれしかなかった・・・。

第8回(後書き)

第9回へ続く・・・

第9回（前書き）

第25回新風舎出版賞、最終審査落選作品（笑）

第9回

4月、桜が咲き、世間では入学、入社のこの季節、本当であれば、去年の今頃、俺もその中の一人であつたはずなんだ。周りにはいかにも新入生、新入社員ですと言わんばかりの奴らが腐る程いた。

この大学に訪れたのは、あの時の合格発表以来になる。二度と来るはずはないと思つていたが、なぜか今ここに居る。数多くの年の近い奴ら。俺はお前らなんかに劣っているはずはない。俺の合否を決めた奴がどんな奴らなのかは知らないが、相当見る目がないと思えない。

俺はあの時同様、大学に背を向け、そこを後にし、もう二度とここには訪れないだろうなと思つた。

駅に向かう途中、腹が減り、辺りを見回すと、吹上食堂という文字がなんとなく目に入り、ここにするかと思つた。俺は手動の左右に動く扉を開け、中に入ると、カウンターに座つて新聞を広げているおっさんが慌てて吸つていたタバコの火を消し、「いらっしやい」と作り笑顔で俺にそう言つた。俺はそれを見た瞬間、失敗したと立ち止まり、扉を後ろ手で閉めかけたままの状態で躊躇していたが、まー、いいと扉を完全に閉めた。中には客が一人もおらず、朝の早い時間だとはいえ、この味に不安を覚え、そこでここに入った事を完全に後悔した。その店にはタバコを吹かしていたおっさんと、もう一人おばさんも居た。恐らく、夫婦で店をやっているのだろう。「ごめなさいねー」

そのおばさんがさっきのおっさんの態度についての事だろう、俺にそう言つてカウンターの席に俺を通した。

椅子に座り、座つてしまつた以上仕方がないと、早く事を済ませてしまおうと店のメニュー表からあまり見ずに適当な定食に決めると、そのおばさんに「これ」と、メニュー表に指を指した。

数秒後、おっさんが勢いよく物を炒める音が店内に響き始めた。

その音をBGMに改めて店内を見渡すと、特に店が汚い訳でもなく、最初のおっさんの態度を除けば、店の年輩夫婦の印象は特に悪い物でもない。こうして俺一人の分の料理を作ってる間にも、仲良く雑談している。店員が暗く、陰気な雰囲気な店ならともかく、こうした明るい雰囲気ならば、客も寄つてきそうな感じもするが．．．。やはり、味に問題があるのだろうか。そんな事を考えている内に、BGMが途切れた。ふと、厨房に目を向けると、料理が出来上がったのだらう、おばさんが料理を運んで来た。

「お待たせー」

必要以上の笑顔で、おばさんは俺の手元に料理を置いた。

目の前にある肉野菜炒め定食を見てみると、特に変わった様子もなく、いたって普通の物だった。食べるのに不安があつたが、とりあえずメインを口に運んだ．．．。うまい．．．。『まずい』という前提で食べただけに、余計にうまく感じたのかもしれない。そうになると、なぜ店が繁盛していないのかが分からなくなった。もしかすると、たまたま今は俺一人だけなのだろうか。いや、あの店に入つて来た時のおっさんの態度は、明らかに客が来る事を想定していなかつた態度だつた。それ以上に、あれは『客が来てしまった』といった感じにさえ．．．。

「そのおっさんかい？」

厨房に居るおっさんは、俺にそう話しかけて来た。

俺は一瞬顔を上げ、再び視線を落とすと、「．．．いや」とだけ答えた。

「いやね、初めて見る顔だから、その新入生かと思つてね」

「．．．」

俺はおっさんのその言葉に少し考えた後、無言で再び食べ始めた。そしておっさんは、それ以上問いただしてくる事をしなかつた。

少しの沈黙のあと、入り口横の本棚の上に置いてあるテレビの音声が背中越しに耳に入ってきた。どうやらおっさんがスイッチを入れたらしい。

「・・・の少年グループ3人は、川越市に住む会社員　さんに殴る蹴るの暴行をし、現金3万円が入った財布を奪って逃走したという事です。今もその少年グループ3人は・・・」

そのニュースの内容を聞いて、『似ている』と思ったと同時に、またあの忌まわしい記憶が生々しく脳裏に浮かんだ。

「いやー、ひでー事しやがるな最近の若い奴らは。なー」

おっさんは強い口調でそう言うと、あばさんに視線を送った。

「ええ、そうだねー」

おばさんはおっさんに視線を送る事なく、テレビを観ながらそう答えた。

この夫婦は、まさか同じような事件の被害者が目の前に居るといふ事を夢にも思ってもいないのだろう。それは当然の事だろうが、何かなんとも言えない複雑な気持ちになった・・・

俺はその後定食を食べ終えると、コップの水を一気に飲み干し、無言で立ち上がるとレジに向かった。

・・・そしてその大学に落ちた人間だとも思っていないのだろう。この人達にとって、それはなんでもない言葉なのかもしれない。しかし、俺にとっては重要な言葉だったんだ。

俺はレジに立つおばさんに無言で定食代600円丁度を渡すと、店を出ようと扉に左手をかけた。

「良かったらまた来てね」

おばさんは最後にそう言った。

『また来てね』

思いがけないその言葉に、何か違和感を感じた・・・。

第9回(後書き)

第10回へ続く・・・

第10回(前書き)

第25回新風舎出版賞、最終審査落選作品(笑)

第10回

その日の午後、その食堂のテレビのニュースで再び憎悪を触発された俺は、衝動的にあの事件以来、初めて警察署に一人で行つてみる事にした。いや、行つてみると言うよりも、乗り込むと言つた方が正しかったのかもしれない。

警察署にやってくると、入口の自動ドアは機能を停止させている状態で開け放たれており、腹が立つ程開放的だった。それならばと、構わず中へと一直線に入つて行つた。

周りを見渡すと、中には5、6人の警察官がディスクで何か仕事をしているのと、20代の一般の奴らだらう男2人が中央にある長椅子に座っているのが目に入った。一瞬、警察官の数人が俺にチラツと視線を送つたが、特に気にする訳でもなく、再びディスクの仕事に戻つた。

受付らしい受付はなく、く課というような物が書かれた看板がいくつもあったような気もするが、俺は一番手前のディスクで仕事をしていた若い警官に声をかけた。

「あの」

若い警官は、不意を付かれたかのように瞬時に首をあげ、俺の姿を確認した後、「はい」と答えた。

「あの、一昨年の10月に起きた事件について、今はどうなっているのか調べてほしいんですけど」

「・・・えっ、あ、はい。あのー、失礼ですが、被害者の方か何かで・・・」

「そうです」

俺は詳しい事を説明すると、その若い警察官は動揺しながらも席を外し、年輩の警察官のディスクに小走りで向かった。そしてその年輩の警察官と少し話した後、今度は別のディスクに移動し、何やら資料をまさぐり始めた。そして次の引き出し、また違う引き出し

と資料をまさぐった。その時間は5分、10分、いや、もっと長い時間を感じられた。俺は、そのあたふたしている若い警察官の姿を見て、次第に、もうどうでもいい気持ちになった。

「もー、いいですよ」

「．．．少々お待ち下さい」

若い警察官はそう言って、更にあたふたしながら資料をまさぐった。

「もー、いいですって」

そいつは俺の言葉を聞き流すかのように資料をまさぐった。

「もー、捜査はしてないんでしょ？打ち切ったんでしょ？」

「いや．．．」

そいつは俺のその言葉で資料を探す動きをようやく止め、顔だけをこっちに向けてなんとか口に出したという感じでそう言った。

「だって．．．だってあれから一度だってこっちに連絡してくれた事なんてなかったじゃないかー！！」

俺はそう叫ぶと、勢いよく警察署を飛び出し、ひたすら走り続けた。

もういい、警察を少しでも当てにしていた俺がバカだった。あいつらは俺が必ず見つけだして俺の手で殴り蹴り殺す！あの時俺がやられたのと同じく、ゆっくり、ゆっくり、何度も同じ所を、何度も．．．。

俺はそう考えるといくらか落ち着き、笑みを浮かべた。

第10回(後書き)

第11回へ続く・・・

第11回(前書き)

第25回新風舎出版賞、最終審査落選作品(笑)

第11回

5月、暖かいというよりも暑くなってきているこの季節、『金がない』ただその理由でバイトをする事にした。去年、郵便局のバイトを辞めてからいくつかの短期のバイトはやったが、今年に入ってから初のバイトだった。そのバイトは菓子製造のバイト。和菓子の製造が主な仕事で、期間は5月3、4日の2日間。世間ではゴールデンウィークらしいが、フリーターの俺にとって、全く関係がない。もつと言えば、日々の曜日すらあまり関係がない。

その2日間は苦痛でしかなかった。ベルトコンベアーから次々と流れて来る白い物体に葉を巻くだけの単純作業。それを1日7時間繰り返す訳だから腹が立つ。これをどんな奴が買うのか知らないが、俺の苦勞も知ったうえで買えと言った感じだ。それは全く意味のない2日間だった。

第11回(後書き)

第12回へ続く・・・

第12回(前書き)

第25回新風舎出版賞、最終審査落選作品(笑)

第12回

6月、梅雨の嫌なこの季節、当たり前だが、どんな天候であれ、俺の日課は欠かさない。21時過ぎ、小雨が降る中、今日もあの場所まで自転車で同じコースを走る。この位の雨なら傘などさす必要はない。

こうして郵便局のバイトを辞めた今でも21時過ぎに必ず家を出て行く理由を、家の連中にはロードワークという事になっている。それなら、何も疑われる事はないだろう。

時折、capのツバから流れ落ちる雨の雫を気にしながら俺はひたすらあの土手へとペダルをこいだ。次第に街灯の数も減り、視界も悪くなってきた。そして舗道からジャリ道へと変わり、幾度もバランスを崩しそうになった。

あの事件から1年8ヶ月、俺は今まで奴らを見つけて出す為に色々な所を探し回った。繁華街や飲食店、それにアミューズメントパークやレジャー施設など。だが、奴らを見かけた事は一度もなかった。そうは思いたくないが、最近、奴らの顔がよく思い出せなくなっているような気がする。もし、街で奴らを見かけたり、もしくは奴らが見えたら、再び俺の前に現れても、果たして俺は、『俺をやったのはこいつらだ!』と言い切れるのだろうか。

なんだか今日の俺はどこかおかしい。もしかしたら、冷たい雨が俺をそうさせているのかもしれない。

第12回(後書き)

第13回へ続く・・・

第13回(前書き)

第25回新風舎出版賞、最終審査落選作品(笑)

第13回

7月、梅雨も明け、暑い夏がやってくるこの季節、奴らの行方の手掛かりは突然やってきた。

今日も21時に家を出ると、自転車に乗り込んだ。21時といえども、今日は25 を超える熱帯夜だった。ペダルをこぎだすと、ほんの少し走っただけで大量の汗が吹き出てくる。家からその土手までは自転車で5分位の所にあるが、着いた時には汗だくになっていた。自転車を置き、俺は土手の上からあの時奴らに引きずり込まれた芝生のスペースを見下ろした。あの時油断さえしなければ．．．油断さえしなければ奴らにやられるはずがなかった。視線の先の芝生には、ボロボロになった自分自身の情けない姿が映った。ここに毎日訪れるのは、奴らともう一度遭遇する為ともう一つ、こうして現場を見つめる事によってあの時の記憶を蘇らせ、己を奮い立たせるのもその理由だった。

俺は奴らを絶対に許さない。この手で必ずぶち殺す！

こうして今日も俺はあの時の事を思い出すと、奴らに対する怒りは膨れ上がっていった。

ある種の儀式が終了し、俺は来た道に戻ろうと自転車の方に体を反転すると、その時足下に何かがあるのが目に入った。辺りは薄暗く、見下ろすだけではそれがいつたいなんなのが識別出来なかった。俺はそれを確認する為そこにしゃがみ込むと、その物体の20cmの所まで顔を近づけた．．．。財布？俺はそれを手に取ると、暗がりの中よく見てみた。どうやら黒い財布のようだ。すかさず中を開けると、金は一銭も入っておらず、いくつかのクレジットカードのような物が入っているだけだった。と、その中に、運転免許証が入っている事に気がついた。もしか．．．俺はそれを含めたカードをその財布に入れ直すと、その黒い財布をズボンの右ポケットにしまい込み、家まで自転車を飛ばした。もしかしたらこれが奴らの

手掛かりになるのかもしれない。そう思うと、俺のペダルをこぐ足も自然に強くなった。その時の俺は、とても興奮していた。

いつもより早い時間に家へと戻って来ると、すかさず2階に駆け上がり、自分の部屋へ入った。服の下に流れる汗も気にせず、ズボンの右ポケットから黒い財布を取り出した。中を開けると運転免許証だけを抜き取り、外は暗く見えにくかった為、改めてじっくりと見てみた。顔写真を見てみると、30代後半だろうか、どこにでもいるような短髪の男がそこには写っていた。住所は．．．近い！やはりあの土手の近くに住んでいるようだ。名前は『青葉拓志』。生年月日を見ると、歳は『36』だった。

俺が思うに、この男も俺と同じようにあの土手を通りかかった時に何者かに襲われ、そして財布を抜き取られ、中身だけ取られて財布だけ投げ捨てられたのだろう。俺のこの考えが確かなら．．．。

まずは明日この家に行つて確かめてくるしかない。

俺はやつらと再び遭遇する。明日この男に会えばと、なぜかそのように確信していた。

俺はエアコンのスイッチを入れ、ベットに仰向けになり、天井の一点を見つめ、そして拳を握りしめた。

第13回(後書き)

第14回へ続く・・・

第14回(前書き)

第25回新風舎出版賞、最終審査落選作品(笑)

第14回

目が覚め、目覚まし時計を目をやると、時刻は『9時35分』になつていた。あれから寝るつもりではなかったが、どうやら自然に寝てしまったらしい。

1階へと階段を下り、シャワーを浴びると、トーストだけの軽い食事をとつた。俺が午前中に1階へと下りてくるのは滅多にないのでこの時間帯の家の奴の事は把握していないが、まー、この時間は妹は学校だろうし、居間からテレビの音声が聴こえてきたからそこに母親が居たんだろう。

2階へと階段を上がり、出掛ける身支度した後、再び階段を下り、一直線で玄関に向かった。下駄箱から自分のスニーカーを取り出し、履いていると、「何処かに行くのー？」という母親の音がキツチン辺りから聞こえてきた。それは午前中に起きだしてくるのはおるかましてや出掛けようとしている俺を奇妙に思つてのセリフだったのである。俺はそれに対して何も反応する事なくスニーカーを履く行為を続けたが、母親は玄関まで寄つて来ると再びこつ言つた。

「何処に行くの？」

そのニュアンスが俺には何か悪い事でもしに行くのではないかというように聞こえ、腹が立った。そして振り返る事なく背を向けたままこつ言つた。

「いちいち場所を言わなきゃまずいの？」

「そうじゃないけど、ただ．．．」

言葉を選びきれなかったのか、母親はその後に続く言葉を言わなかった。何か言いたいのならはつきり言えよと、俺はそのまま何も言う事なく家を出た。

玄関の扉を閉め、前を向くと、眩しい光で前を遮られた。時刻は朝の10時30分。今日も朝から25 を超え、とても暑い。いくらか目が馴れてくると、自転車に乗り込み、ペダルをこぎ始めた。

普段、家においても何もする事がなく、ましてや何処かに出掛け、特別誰かと会うといった用事もない俺にとって、日中こうして自転車を走らせ、目的の場所まで向かうという行為に違和感を感じていた。

途中、本屋に寄り、住宅地図で詳しい場所を調べると、再び自転車を走らせた。今日は金曜日で、もしかしたら『青山拓巳』という男は仕事で家に居ないのではないかという考えも昨日の段階で脳裏に過っていたが、俺には土、日まで待とうという気持ちにはなれなかった。

やがてそうだと思われる住宅街へと入り、表札の所に住所が書かれている家を見て廻りながら『青山』という姓を探す。この町は何度か通った事があり、いくらか土地勘はあった。後は番地を合わせるだけの所まで来ると、俺は自転車を押しながら表札を一軒一軒じっくり見ていった．．．。『青山』．．．あつた！ここだ。ここに違いない。住所は書かれていなかったものの、『青山』という姓はそんなに多いとは思われない。そこはごく一般的な一軒家で、新築とはいえないものの、比較的きれいな家だった。しかし見つかったはいいものの、俺はそこでためらってしまった。なんと行って話を切り出せばいいのだろうと．．．。俺は何をするでもなく、自転車のハンドルに手を掛け、悩んだ。そしてそんな意味のない事をしている自分に腹が立ち、勢いだけでインターホンに右手を伸ばすと突然玄関の扉が開いた。俺は反射的に手を引っ込め、扉からゆっくり出てくる人影を目で追った。

「あの、何か．．．」

明らかに警戒しているその口調でそう言うのは、30歳代前半の女の人だった。扉を半分開けたまま、ノブに手を掛けこちらの様子を伺っている。

「あの、財布を拾って．．．」

思いがけない展開に、俺はそう答える事しか出来なかった。

すると突然その女の人の表情は一変したかと思うと、扉を開けっ

ばなしのままこっちに走り寄って来た。その瞬間、ここの家で間違いない事を確信した。

「それ本当？」

家と道路を隔てた白い柵越しで、女の人は俺の目を真っ直ぐ見つめてそう言った。

「はい」

そう、俺がその言葉を口にしてると同時に女の人の視線が俺の手元に落ちたのが分かった。俺はそれを見て、ズボンの右ポケットを探り、あの黒い財布を取り出した。女の人はそれを見た瞬間、ハツツとし表情になったかと思うと、半ば奪い取るようにして黒い財布を手に取り、眺め、そして中を開けた。

俺は何も言えず、その女の人の手元を見ている事しか出来なかったが、女の人が即座に確認したのは、札や小銭を入れるスペースではなく、カードが入ったスペースの所だった。そしてその一番手前に入れてあった運転免許証を見つけると、ゆっくりとそれだけを抜き出した。女の人はそれをまじまじと見つめると、なんとも言えない悲しいそうな表情になった。

「あの、その財布をあそこの土手で見つけて．．．」
言葉を口にするタイミングが分からず少しためらったが、俺はそう口にした。

すると女の人は視線を運転免許証から上の方に外したかと思うと、今度は一転下の方に視線を外し、女の人の目が潤んでいるようにも見えた。

やっぱりそうだ。俺はその姿を見て全て悟った。

「あの、この青山拓巳という人に会わせてもらえませんか!？」

それを聞いた女の人は一転、驚いた表情になった。

「なんで?なんであなたが主人に会わなければならぬの?」

「やられたんだ。俺もあの土手で奴らにめちやくちやにされたんだ

よー!」

俺のその叫びが、静かな住宅街に響いた．．．。

第14回(後書き)

第15回へ続く・・・

第15回(前書き)

第25回新風舎出版賞、最終選考落選作品(笑)

第15回

辺りを見渡すと、幼い子供が書いたような絵が一枚壁に貼られているのが目に止まった。なんとか人の顔を書いたのだと分かる位のゴチャゴチャな絵。『あおやまあつ?』絵の左隅になんとかそう読める小さな字で書いてある。ここの子供だろうか。

「あ、それね、うちの5才になる息子が描いた絵でね．．．パパなんだって」

女の人は笑顔でそう言いながら、俺の手元のテーブルの上にお茶を置いた。俺はあれから家の中に通され、こうして居間のソファーに腰を掛けている。女の人の話によると、旦那さんである『青山拓巳』という人も、つい一週間前、俺と同じように土手で自転車に乗って会社から帰宅する途中、若い2人組に止められ、殴る蹴るの暴行を受けたあげく、自転車と財布を取られたのだという。それは俺の受けたのと全く同じ状況だった。そして症状は俺よりも重い全治3ヶ月。今は入院中だという。

「それでさっきの話だけど、明日の今位の時間に君の．．．あ、まだ名前聞いてなかったよね」

女の人にそう言われ、俺は一瞬戸惑った。

「成瀬．．．成瀬結」

「あ、ゆい君ね、いい名前．．．」

「成瀬でいいです」

「あ、成瀬さん．．．ね。それで、明日の今位の時間に成瀬さんの家に車で迎えに行く形でいいかしら?」

「いや、自転車でもまたこっちに来ます．．．」

「そう、じゃー、それから一緒に車で病院に行きましょう」

俺はその問いかけに、静かに首を縦に振った。

今直ぐにでも病院に行き、『青山拓巳』という人物に会って詳しい話を聞きたかったが、女の人がこれから用事があるらしく、俺は

高まった気持ちを抑える事に専念した。そしてここに居ても意味がないと、俺は立ち上がった。

「あら、もう帰っちゃうの?」

「・・・はい」

「そう、それじゃー、明日の・・・そうね、10時半位でいいかしら?」

「・・・はい」

俺は小さく頷きながらあいづちを打ち、玄関まで歩いて行った。

俺がスニーカーを履き終わると、女の方は、最後に「よろしくね!」と言って終止笑顔で俺が自転車に乗って走って行くまでわざわざ外まで出てきて見届けていた。しかし、その笑顔は作られたものだという事に俺は気がついていった。その笑顔の裏に、俺を可哀相な人として見ているのがひしひしと伝わってきたからだ。

外は行きより更に暑く感じられた。さっきまで居た部屋が冷房が寒い位にかかっていたせいなのかもしれない。しかし、俺の考えは当たっていた。犯人が見つかっていないのは悔しいが、『青山拓巳』という人をやった奴らと俺をやった奴らが同一人物だという事は、女の人の話から犯人が2人であり、年齢層が一致している事、そしてその手口からその可能性は高いだろう。後は、本人に会って直接聞いてみればもっと何か見えてくるはずだ。

少しずつ、少しずつだが、奴らに近づいているのは確かな気がした・・・。

第15回(後書き)

第16回へ続く・・・

第16回(前書き)

第25回新風舎出版賞、最終審査落選作品(笑)

第16回

次の日の土曜日、朝の9時にセットしておいた目覚まし時計が鳴る5分前になぜか目が覚め、俺はベットから置きだした。

一階へと階段を下りると、キッチンで洗い物をしている母親の後ろ姿が見えた。キッチンへ歩いていき、俺が冷蔵庫を開けると、その音でそこで初めて俺の存在に気がついたのか、「あつ、結、おはよう」と母親が驚きを隠しているかのようにそう言った。

俺は無言で茶だんすからコップを取り出すと、そこに牛乳を注いだ。

母親が驚いたのは、音もたてずに突然現れた俺に驚いたのと、午前中に一階へ下りてくる事は滅多にない俺が、こんなに朝早く起きてきた事、ましてや2日連続なんて今までありえない事だったからだろう。

「トーストにする？」

牛乳を飲んでいる俺に母親が食パンを手にしながらそう言った。

「自分でやる」

俺はコップをテーブルに置き、そう言った。

「あ、目玉焼き焼きましようね」

「いいから」

冷蔵庫を開けながらそう言う母親に、俺は強い口調でそう言った。

「・・・愛はね、ついさつき出掛けたのよ。友達と遊びに行くって・・・でもね、最近の愛、なんか怪しいのよね・・・お母さんが思うに、あれは彼氏が出来たのよ。同じ女だからなんとなく分かるんだー・・・だから正直に言ってくれても、お母さんは全然OKなんだけどなー。うちに連れてきて、紹介して・・・」

その話を聞いて、そういえば学生は今日は休みなんだと気がついた。

トーストが焼け、椅子に腰掛けそれを無表情に食べていると、居

間に歩いて行っただと思っただ母親が、手に何かを持ってキッチンに戻って来た。

「あのね、これ、どうかなー？」

俺の手に差し出された長方形の紙。真ん中に車の走る写真が載っている。

「うん。自動車教習所のパンフレットなんだけど、やってみたらどうかなって・・・」

「なんで？」

俺は母親を見上げた。

「いや、持っても損はないじゃない。それに免許持っていれば何かと便利でしょ？」

母親はそう言っただ笑顔を見せた。

「就職に役に立っただ事でしょ？遠回しに俺に就職しろって言う圧力なんだから！？」

「違う！違うのよ、結」

俺は立ち上がり、かじりかけのトーストを残し、浴室へと小走りで向かった。そして頭上から降り注ぐ熱いシャワーを浴びながら、何もかも、何もかもがムカつく。そう心の中で呟いていた。

第16回(後書き)

第17回へ続く・・・

第17回(前書き)

第25回新風舎出版賞、最終選考落選作品(笑)

第17回

外は昨日と同様、いや、それ以上に暑く感じられた。俺は、その暑さを振り払うかのように自転車を飛ばし続けた。

やがて昨日の住宅街へと入り、直ぐに『青山拓巳』という人の家を見つけると、白い柵の前に自転車を止めた。時刻は『9時55分』。少し早い気もしたが、俺はインターホンのブザーを押した。5秒位経った後、2階のベランダから昨日の女の人が顔をのぞかせた。

「あ、結くん！おはよう！どうぞ、玄関開いてるから」

女の人は俺を確認するなり笑顔でそう言った。何か圧倒され、俺は名前をくんづけで呼ばれたのを否定する事も出来ず、家の中へと入って行った。

家の中に入ったはいいものの、女の人はまだ2階なのか、俺は直ぐに病院に向かうものだとばかり思っていたのでどうする事も出来ず、ただ居間の辺りをブラブラしていた。そうしていると、昨日同様、壁に貼られたゴチャゴチャな絵が気になって目に止まった。

「いやー、暑い、暑い．．暑かったでしょー？何か飲んでって手で顔を扇ぎながら女の人は階段をゆっくり下りてきた。

その声に反応し、俺は女の人に顔を向けた。

女の人はキッチンに向かうと冷蔵庫を開け、麦茶らしき物が入った、注ぎ口の付いたプラスチック製の容器を取り出すと、コップにそれを注いだ。

「適当に座っててくれてよかったのに」

女の人は居間のテーブルにそのコップを置いた。

「あ、やっぱりその絵気になる？うちの子、天才じゃないかって思うのよね。ほら、ここのタッチなんていい感じじゃない？」

「．．．」

「って親バカかもね」

そう言って女の人は微笑んだ。

「あの、出掛けませんか・・・」

「あ、そーね。主婦もね、結構大変なのよー・・・結くんのお母さんもそういう風に言わなーい・・・」

「だから、俺の名前は・・・」

俺がそう言う前に、女の人は階段を上がって行ってしまった。そしてその一分後、再び階段を下りてくるところ言った。

「はい。お洗濯終わり！行きましようか？」

「・・・はい」

こういう人の事をマイペースと言うのだろうか。でも、自分でもよく分からないが、俺はその女の人に嫌な感じを抱かなかった。

第17回(後書き)

第18回へ続く・・・

第18回(前書き)

第25回新風舎出版賞、最終審査落選作品(笑)

第18回

車はワゴンタイプの紺色の軽自動車。女の人が運転席側に廻り、鍵を開けたのを確認すると、俺は助手席の扉を開け、そこに乗り込んだ。女の方は運転席に座るとシートベルトをし、エンジンをかけた。

「あ、シートベルトしてね」

そう言われ、俺はシートベルトを締めた。

女の方はギアを左手で動かし、車をゆっくりと前進させた。車は意外にもマニュアルだった。朝の母親との事もあって、女の方の運転操作が気になった。

「結くんは免許持ってないの？」

そう言われ、女の方の運転操作に見とれていた自分にハツとし、女の方の顔を慌てて見た。

「持ってないです・・・」

「そう、持ってた方がいいわよー。持っていれば何かと便利でしょ？」

「・・・」

その言葉に、俺の脳裏に母親の顔が浮かんだ。しかしなぜだろう。この人に言われると、そうかもしれないと思ってしまうのは。

「難しくないですか？」

そう口にしてから自分でハツとした。

「うっん、マニュアルは初めは苦戦すると思うけど、馴れればどうって事ないのよ。私はオートマがホントはいいんだけど、主人がマニュアル好きでね」

俺は、なぜあんな質問をしたのか考えながら、黙って聞いていた。

「男はやっぱりマニュアルでしょー。ね？」

「え？まー・・・」

車は一般道をひたすら走る。左に曲がる時は左のウィンカーを出し、こうして右に曲がる時は右のウィンカーを出す。

「あ、ちよつとガソリンスタンドに寄つてくね」

俺は黙って頷いた。

車は右に曲がった後、その先の左側にあつたガソリンスタンドに入つて行つた。

「いらつしゃいませー!!」

ガソリンスタンドに入つた途端に数人の大きな声が響いた。

女の人は馴れた感じで車を定位置に停車させ、運転席の自動の窓を半分開けると、エンジンを切つた。

「いらつしゃいませ」

「レギュラー満タン現金で」

女の人は、近づいてきた若い男の店員にそう言つた。

「レギュラー満タン入りまーす!!」

「おーい!!」

俺はその掛け声に圧倒された。

「みんな元気いいわね」

辺りを見渡すと、店員は男女合わせて5人程。みんな、店のキャップをかぶっている。客は、こちらの他にもう一台だけだったが、店員はそれぞれ何かしら仕事をし、動いていた。家にも親の車が一台あるが、まず同乗する事はない。ガソリンスタンドに給油しに来たのも、もしかしたら初めてなのかもしれない。

「窓をお拭きしてよろしいでしょうか？」

「あ、お願いします」

白いタオルでボンネットの窓を拭く若い男。こいつはいくつなんだろう。20? . . . いや、もつと若い、もしかしたら、俺と同年なのかもしれない . . . 。少なくとも、歳は俺と大して変わらないだろう。

「失礼します。えー、8リットルで966円になります」

「はい」

女の人は財布を探ると、千円札といくらかの小銭を若い男の店員に渡した。

「1066円ですね。少々お待ち下さい」

そう言うと、若い男は店内の方へ掛けて行き、数秒後、再びこちらに掛けて戻って来た。

「こちら100円のお釣りになります。お帰りはどちらの方になりますか？」

「えー、左でお願いします」

女の人はそう言うと、車のエンジンをかけ、道路の方へ車を進めた。若い男は道路脇に立ち、車を誘導した。車は特に込んでいなかった為、直ぐに道路に入っていた。

「ありがとうございますー！！」

若い男は脱帽し、深く頭を下げた。

車は少し走った後、赤信号で停止した。

「今のガソリンスタンドね、雰囲気がいいからいつもあそこに行ってるんだー」

確かに、悪い気はしない……。あいつはバイトだろうか。もしくは大学に通いながらバイトをしているのだろうか。どちらにしろ、なぜガソリンスタンドで働こうと思ったのだろうか……。

信号は再び青になると、車はゆっくりと動き出した。

あんな大変そうなバイトを選ばなくとも、他にいくらだって楽なバイトはあるはずだ。時給だってそこらのバイトとなら変わらな
い、いや、むしろ安い気さえするのに……。

第18回(後書き)

第19回へ続く・・・

第19回(前書き)

第25回新風舎出版賞、最終審査落選作品(笑)

第19回

「着いたわよ．．．結くん？」

その呼び掛けにハツとし、顔を上げると、フロントガラスから左前方に、わりと大きな茶色の建物が見えた。

車はその建物の前までやって来ると、左へ曲がり、建物内へと入って行った。

「じゃー、行きましようか」

女の人は駐車場に車を止めると、俺にそう言い、外へと出た。俺もそれを見て、外へと出た。と、その瞬間、暑さと眩しい太陽が全身を覆った。目を細めながら建物の上を見上げ、大きく書いてある病院名を見ると、どうやらそこは総合病院のようだった。外観は、茶色いレンガの様な物で出来ており、わりと新しい印象を受けた。

女の人の後から付いて行くような形で手動のガラスの扉から中へ入ると、冷房の涼しさと病院特有の匂いが全身を覆った。

「ちょっとここに座って待っててね」

俺は、受付に小走りで向かう女の人の後ろ姿を目で追った。長椅子は所々空いてはいたが、俺は立って女の人を待つ事にした。

病院へと来たのはあの時以来だった。そう、あの夜、救急車で運ばれたあの日だ．．．チクシヨウ．．．この匂いに再びあの時の記憶が脳裏をかすめながら、俺は辺りを見渡した。

周りの奴らはどれも弱々しい姿をした老人達ばかりだった。少しでも触れようものなら倒れて骨でも折ってしまいそうな勢いだ。いっそう倒してしまおうか。と、女の人がこちらに振り返り、歩いて来るのが視界に入り、俺は女の人に視線を戻した。

「どうかした？」

「いや．．．」

俺は女の人に自分の考えている事を悟られないよう、平静を装った。

「そう。じゃー、行きましようか」

再び後を付けるように歩き出すと、エレベーターに同乗し、そして女の人は3階のボタンを押した。

「主人の部屋はね、相部屋になってて、他に5人の患者さんが居るんだー」

俺はそれに何もリアクションする事なく黙って聞いていた。

その間にもエレベーターは3階へと到着し、扉が開いた。その瞬間、ここまで来るのに何も思わなかったのに、なぜか妙な緊張感が走った。

女の人はエレベーターを降りると、右の方向へ歩き出した。そしてある部屋で立ち止まると、部屋の患者の名前が書かれている所を見つめた。

部屋は303号室。女の人の言う通り、6人の名前が白いプラスチック製の板に黒のマジックで書かれていた。順番通り名前を見ていくと・・・『青山拓巳』という名前が直ぐに見つかった。

「ちよつとここで待っててもらっていいかな？」

「はい」

さっきまでとは全く違った女の人の真剣な表情に、考える事なく『はい』と言わされてしまったような気がした。

女の人は部屋の扉を開け、中へと入っていた。

恐らく、俺の事を『青山拓巳』という人に予め説明するのだろう。無理もない、いきなり見ず知らずの奴と一緒に入って来ても、驚くに決まっている。

第19回(後書き)

第20回へ続く・・・

第20回(前書き)

第25回新風舎出版賞、最終審査落選作品(笑)

第20回

あれから、3分、いや、5分は経っただろうか。中の様子が全く分からないだけに、とても長く感じられた。そしてその部屋の前を看護師や患者が通る度に、中に入るのではという緊張感が走った。と、突然、ドアノブが動くのが分かり、反射的にそこを見た。

「ゴメンね、どうぞー」

女の人は扉から半身を出し、少し抑えた声でそう言った。その表情は笑顔だったが、俺には作り笑顔に見て取れた。それだけに、何か神妙さが伝わってきた。

半分開かれたままの扉から部屋の中へとゆっくり覗くようにして入ると、そこには左右3つづつの、計6つのベッドが置かれ、それぞれ患者が横になっており、独特の空気が漂っていた。

「こつちよ」

扉の脇には女の人が待つており、俺を誘導するように部屋の奥へと連れて行った。左隅の窓際のベットに半身の状態でこちらを見ている一人の男。頭と左足に包帯が巻かれてはいるものの、その人が『青山拓巳』本人だという事は直ぐに分かった。目の前までやって来たが、その痛々しい姿を見て、いや、そうでなくとも何か声をかけられたかどうかは分からないが、俺は下を向いたまま立ち尽くし、ジツとしていた。

「ありがとう。君が財布を拾ってくれたんだね。妻から色々聞いたよ」

その声に反応し、俺はそこで初めて男の人の目を見た。

「あ、・・・」

俺はこの人に何か言いたくてここに来たんじゃないのか!?俺は心ではそうは思っているものの、その気持ちに言葉が付いて来れないでいた。

「あ、私、お花の水換えてくるね」

その唐突過ぎる行動に、席をはずしたというのが直ぐに分かった。いや、もしかしたら男の人が女の人に目で合図をしたのかもしれない。

男に人は、女の人が部屋をで、扉が閉まる音を確認するかのよう
に、こう言った。

「君の言いたい事はよく分かる。恐らく、君も私も同じ少年達にや
られたんだらう妻の話を・・・」

「奴らはどんな格好でした!? 背は!? 一人は茶髪でしたよねー!
もう一人の方は背が低くて・・・」

「結くん、落ち着きなさい」

「多分、土手の近くに住んでる奴らだとは思うんですけど、俺はあ
れから毎日あの土手に・・・」

「結くん!!!」

「殺してやりたいんだ!!! あいつらを探し出してこの手で殺してや
りたいんだよ!!!」

部屋の中の時間が、一瞬止まったような気がした。

「分かるよ! 君の気持ちは一番私がよく分かるよ。でも、こういう
時だからこそ冷静にならなきゃいけないんじゃないのか?」

『君の気持ちは一番私がよく分かる』その言葉を聞いて、俺はいく
らか落ち着きを取り戻したような気がした。

「なぜ君は彼らを殺したいと思うんだい?」

その答えの分かりきった質問に、俺は少し拍子抜けした。

「悔しいからですよ。俺が受けたものを倍にして返してやりたいか
らですよ」

「それで君は満足なのか? 彼らに復讐した後の君に何が残る?」

「満足感と達成感ですよ。俺はその為に今まで生きてきたんだ」

男の人は首を左右に振った。

「それは違う。君に残るのは虚しさだけだよ」

「分かりきった事を言うな!」

「分かるよ! 君と同じめに合ったんだから分かるよ・・・俺も悔し

いよ。正直、殺してやりたいつて思った事もある．．．でもそれじゃー、解決しないんだ。君は今しか見ていない。もつと先を見なきゃダメなんだ」

その説得力のある言葉を聞いて、この人は俺と同じ境遇だという事をもう一度思い出し、俺は何も言い返せなかった。

「チクシヨウ．．．」

分かっている。分かっていた。その男の人に言われなくとも、そんな事は分かりきっていたのかもしれない。ただ．．．

「悔しい、悔しいよ．．．」

気がつく、目から涙が流れていた。あれから一度だって涙を流した事なんてなかったのに。なぜだろう．．．。

「私はね、あの事件に遭った際、私には失った物しかないと思っていたんだよ。でもね、最近になってそれは間違っていると気がついたんだよ。こうして今は身動き出来ないが、体を自由に動かせる事、そーして働けていた事がどれだけ幸せな事だったんだなって。それにこうして妻が私の為に病室に見舞いに来てくれるおかげで、妻の優しさを再認識させられた。それらの全てが、あの事件で得た物なんじゃないかって．．．君にいたっても同じ事だよ。そうは思わないかい？」

なぜ、なんでそんな風な考え方が出来るんだ。俺は奴らに対する復讐心だけしか考えていなかった。大学受験に失敗したという、そのただ一つの失った物しか頭になかった。得た物なんてこれっぽっちも考えていなかった．．．。

もしかしたら、初めて心を許せる人に出会えたからなのかもしれない。それは決して同じ境遇にあった人という事だけではなく、うまく言えないが、その人の持つている人間の内の部分。

．．．ただ、自分の事を分かってくれる人を探していただけなのかもしれない。奴らに再び遭遇し、殺してやりたいのではなく、本当は、そう言ってくれる人をひたすら求めて．．．。

「頑張ろう、一緒に頑張ろう！」

第20回(後書き)

第21回へ続く・・・

第21回(前書き)

第25回新風舎出版賞、最終審査落選作品(笑)

第21回

帰りの車の中、女の方は行きとは違い、とても静かだったような気がする。恐らく、男の方との会話を聞いていたのだろう。何か俺に気を使っている。そんな気がしたからだ。しかし、居心地の悪さは感じなかった。

「あの、俺、免許取ろうと思うんですけど」

「・・・あ、そーう。いいんじゃない！あのね、駅前の教習所より、あそこの郵便局の近くにもあるじゃない。あそこの方がいいって・・・」

俺のその言葉をキツカケに、女の方は喋り始めた。そしてこの青山さん夫婦に出会えた事をキツカケに、俺は少しずつ自分自身が変わっていくのが自分でもよく分かった・・・

自転車で駆け抜ける帰り道、暑さはこたえたが、それでも風は心地よかった。

・・・そしてそれを素直に認められる自分もいた。

家に着くと、母親に免許を取りたい事を告げると、少し驚かれたが、快く了解してくれた。そして明日、教習所にその手続きをするつもりだ。

夜になり、今日という日を振り返りながら、俺はいつしか眠りについていた。そしてその日はあの日以来、土手に訪れる事をストップした日にもなった。しかしそれは後々気付いた事なのだが・・・。

第21回(後書き)

第22回へ続く・・・

第22回(前書き)

第25回新風舎出版賞、最終選考落選作品(笑)

第22回

8月、夏本番のこの季節、学生達は夏休みまったただ中で、街には学生達が沢山いた。そしてこの自動車教習所も例外ではない。夏休みを利用して免許を取ろうとしているんだろう。

俺の教習簿には、いくつかの判子が押されていた。日をおうごとに、それが増えていく様が、とても心地よかった。教官には怒られる事もあるが、それはそれで素直に受け止めた。そして日をおうごとに、自分が変わっていく様も……。

青山さん夫婦に出会ってから2週間が経ち、俺は再び青山さんに会いに行く為、今度は自分一人で自転車で病院に行く事にした。家からは距離があつたが、行けない距離ではないような気がした。

『いつでも来なさい』

あの日言ってくれたその言葉が、とても嬉しかった。

車の助手席から見た風景を思い出しながら、ひたすら自転車のペダルを漕いだ。

あ、確かこの信号を右に曲がって……。

信号を右に曲がると、その先の左側には、あの時給油したガソリンスタンドがあつた。記憶は正しかったと更に進むと、左前方に茶色いレンガ造りの、あの病院が見えてきた。

病院に到着すると、エレベーターで3階へ行き、303号室の部屋を探した。

扉を開け、部屋に入ると、俺の姿に気付いた青山さんは、突然やってくる俺を温かく迎えてくれた。

「あ、あの、いつでも、来ました」

それは俺の精一杯の言葉だったが、青山さんは声を出して、笑って答えてくれた。

「青山さん……」

「ん？なんだい？」

「俺、変われますかね？」

そう言ってから青山さんが言葉を発するまでの時間が、とても長く感じた。

「・・・そう君が思った時点で・・・変われてるんだと思うよ」

第22回(後書き)

第23回へ続く・・・

第23回(前書き)

第25回新風舎出版賞、最終審査落選作品(笑)

第23回

9月、暑さも和らぎ、夏の終わりを迎えるこの季節、俺には気がかりなものが一つだけ机の引き出しにあった。俺はそれを手に取り、ジッと眺めた。

変わりたい。変わらなきゃダメなんだ。俺は心で自分に言い聞かせると、明日、その決心を行動にうつす事にし、その日は眠りについた。

翌日、俺は走る電車の中に居た。電車に乗ったのはいつ以来だろう。はつきりと思い出せない位久しぶりの事だった。平日の昼間という事もあってか、人はまばらだった。席は充分空いていたが、俺は座席の前の吊り革に掴まり、そこから車窓から見える景色をなんとなく見ていた。

俺はあの日、確実に犯罪を犯した。『窃盗』という犯罪を。俺は俺をやった奴らと全く変わらない犯罪者なんだ。今更になって罪を償うなんて虫が良過ぎるのは充分に分かっている。そして許してもらえるなんてこれっぽっちも思っていない。ただ、本人に会って謝りたい。その後は、俺はどんな罰を受けても構わない。その位の事を俺はしてしまったのだから。

電車は鉄橋をいくつか渡り、車窓から見える風景は、いつからか田園が続く景色に変わっていった。車内の人も、気がつくと周りには誰もおらず、その誰も居ない車内に一人手すりに掴まって立つ俺は、とても浮いていた。

「次は、終点、です」

そう、車掌独特の口調の車内アナウンスが流れ、俺は扉の目前に移動した。

終点でもあるその目的地の駅に到着し、電車を降り左右を順番に見ると、降車した客はどうやら俺一人のようだった。という事は、

電車に乗っていたのも俺一人だったらしい。駅の建物はとても古く、改札はというと、未だに駅員が直接切符を受け取るといった形式を取っているようだった。

俺は改札を出ようと改札の所まで来たが、肝心の切符を渡す駅員が居ない。なぜだろうと改札横の事務室を覗いくが、人は誰もおらず、ただ扇風機が一つ、首を左右にゆっくり動かしながら、誰も居ない事務室に静かに風を送っていた。

俺は仕方なく切符を改札に表向きに置き、駅を出る事にした。

第23回(後書き)

第24回へ続く・・・

第24回(前書き)

第25回新風舎出版賞、最終選考落選作品(笑)

第24回

駅を一步出ると、そこはとてもものどかな場所だった。一つのジューズの自動販売機と、一つの電話ボックスがあるだけだった。聴こえてくる音といえば、大げさな話ではなく、小鳥のさえずり位だった。それはまるで、ひと昔前にタイムスリップしてしまったかのようだった。一言で言えば、『田舎』。そんな所だった。

少しその風景に見とれてしまった俺は、ここの場所に来た理由を思い出し、バックからあの小包を取り出すと、改めて名前と住所を確認した。昨日、インターネットで調べた限り、ここの駅から直ぐというのは分かっていた。名前は『綾坂 新吉』。あまり聞かない名字なだけに、探すのにはそれ程苦労しないはずだ。俺はとりあえず町を歩いてみる事にした。

町は本当に静かだった。それは人気がないのと、車が全く通らない事が、そう思える要因なのかもしれない。小包に書かれてある町名と電柱に貼られてある町名書かれた看板を照らし合わせる限り、どうやらここの辺りで間違いないらしい。

青山さんの家を探した時のように、家の表札の所に書かれてある住所を頼りに一軒、一軒見て廻る。しかしあの時と決定的に違うのは、民家が隣接しておらず、点々としている所だった。

すると、前方から何か動くものが視界に入った。視線をその方へ向けると、それは一人のおばさんだった。頭に手ぬぐいを巻き、手にはクワを持っている。畑仕事だろうか。その人は俺がこの町に降り、初めて見かけた人、いや、動くものと言っても間違いではなかったのかもしれない。そしてそのおばさんとの距離が縮まり、俺はこの人に聞いてみようかどうか少し迷った。

「こんにちはー」

「.....」

俺は、軽い会釈をしながらのそのおばさんの意外な行動に驚いた。

こんな見ず知らずの俺に挨拶をしてくれている。俺なんか挨拶した所でなんの特にもならないのに。

おばさんとすれ違う際、おばさんは優しく微笑んでいた。

いや違う、このおばさんは損得勘定で俺に挨拶をしたんじゃない。このおばさんは道で人に会う度に、誰にでもきつと挨拶をする人なんだ。

俺はおばさんに訪ねてみる所か、挨拶さえ返す事が出来なかった。おばさんの後ろ姿を見つめながら、そんな事を思っていた。

塀の上で日向ぼっこしている猫や、町内の掲示板や、小さな公園を通り過ぎると、後ろからバイクの音が聴こえ、俺は道路の脇に寄った。バイクが俺の横を通り過ぎ、ふと見ると、それは郵便局員の赤いバイクだった。その郵便局員の男の人は、少し先の一軒の家の前で止まり、その家の郵便物を取り分けている様子だった。俺はその様子を確認すると、その郵便局員の元へ翔て行った。

「あー」

「はい」

俺の姿を確認した郵便局員は、取り分けていた郵便物の手を止め、こちらを向いた。

「あの、こちら辺に「綾坂」さんて家知りませんか？」

「あー、綾坂さんでしたら、ほら、あそこに大きな木があるじゃないですか。あそこの家がそうです」

俺は郵便局員の指差す方向へ顔を向けた。確かに一際目立つ大きな木がある。その横に並ぶようにして一軒の家があった。

「あ、どうも」

そう軽く会釈すると、再び綾坂さんの家の方向に顔を向け、じつとその家を見つめた。あの家がそうなんだ。。。

第24回(後書き)

第25回へ続く・・・

第25回(前書き)

第25回新風舎出版賞、最終審査落選作品(笑)

第25回

その大きな木を目印に歩みを進めて行き、とうとう探していた綾坂さんの家の前までやって来た。遠目からでも大木と分かるその木を目の前にすると、なんの木なのかはよく分からなかったが、とても威圧感のある木だった。家の表札には、『綾坂』としっかりとした字体で刻まれており、それを見て、更に緊張感が増した。割と大きな家で、木や石などが並んだ庭もある。そしてその奥に2階立ての家が建てられていた。

とにかく謝ろう。自分の犯した事実を伝えよう。そして誠意を現そう。俺に出来る事はそれしかない。俺はインターホンに右の人差し指を近づけいった。右手が小刻みに震えているのが自分でもよく分かった。その震えを抑えようと、左手を必死に添えると、その左手も右手の震えを伝わって一緒に震え始めた。

違う！俺はもう昔の俺じゃない。変わるんだ。俺はもう変わったんだ！！

右手を抑えていた左手を退け、もう一度右手の人差し指を、今度は勢い良くインターホンに近づけた。

「ワンワン！！ワンワン！！」

その背後からの声にビクツとした俺は、その声の先に振り返った。そこには物凄い形相で俺を吠えまくる一匹の柴犬がいた。よく見ると、その犬には首輪が付けられていない。

「こら、若^{わか}、お客様じゃろうがー。吠えるのをやめんかー」

そうやってしゃがみながら犬をなだめるその声の主は、小柄な一人の老人だった。もしかしたらこの人が、『綾坂新吉』さん本人なのではとその時思った。

「すまんのー。この子はいい子なのじゃがのー．．．わしに何かようかい？」

「あ．．．」

「ワンワン！ワンワン！！」

「若！．．．すまんのー．．．どうぞ、中に入って下さるか」

「いや、俺は．．．」

老人は庭先に犬を放すと、俺はその老人に言われるがまま、家中へと案内された。自分の正体もまだ明かしていないのに、なぜ家にあげられるのか不思議に思った。玄関の鍵を開ける事なく家の中へ入ったので、誰か他に住人がいるのだろうと思ったが、その気配は全くなく、とても静かだった。家の中は純和風で、人の家独特の匂いがした。俺は一つの和室に通され、言われるがままその木製のテーブルにある座布団の上に腰を下ろした。

「わしはここに独りで住んでおつてな、お客さんが来るととっても嬉しいんじゃよ」

やはりこの人が『綾坂新吉』さんで間違いない。それを聞いて俺は確信した。

綾坂さんは部屋のガラス戸を開け、続いて雨戸も開けた。その瞬間、光が差し込み、部屋の中は明るくなった。部屋の電気は点けられていなかったが、その外の明るさで充分だった。そこからは庭の景色が見え、とてもキレイだった。よく見ると、木などはよく整えられており、綾坂さんの人間性が見えてくるような気がした。

「姫ひめ！こんな所にいたのかいなー。お前の起きてる姿は本当に見た事ないのー」

いったい誰に向かって喋っているのだろうかと外を覗くと、石段の上に一匹の三毛猫が気持ちよさそうに寝ていた。猫か．．．俺は再び座布団の上に腰を下ろした。

「ちよつと待つて下さらんか」

「．．．はい」

早く話を切り出さなくては．．．。

俺は部屋を出る綾坂さんを目で追いながら、そう自分に言い聞かせていた。

第25回(後書き)

第26回へ続く・・・

第26回(前書き)

第25回新風舎出版賞、最終審査落選作品(笑)

第26回

部屋には木製のテーブルの座布団の他に、目立つ所では一枚の掛け軸が掛けられていた。『成せば成る、成さねば成らぬ何事も、成らぬは人の成さぬ成りけり』掛け軸には、独特の筆のタッチでそう書かれていた。きっと綾坂さんの好きな言葉なのだろう。そして部屋を見渡しながら、綾坂さんにどう切り出したらいいかと、試行錯誤した。

「待たせたのー。こんな物しかないが」

そう言っつてグラスに入った麦茶だと思われる物をテーブルに置いた。

「ジュースの方が良かったのじゃろうが、わしはジュースは飲まさんから家になくてのー」

「いえ．．．」

俺は飲み物を選別出来るような立場の人間ではない。それ所か飲み物を出されるような立場の人間でも決してない！

「あのー！」

「はて、そういえば、わしに何かようじゃったのかのー？」

「俺は．．．僕は、綾坂さんに謝らなくてはならない事があるんです．．．」

「はてー、わしはお主の事を知っておるのかのー？」

「いえ、知りません。僕も綾坂さんに初めて会いしましたし．．．」

綾坂さんは、不思議そうに俺の方を見ていた。

「僕は、綾坂さんにとんでもない事をしてしまったんです」

俺はそう言っつてバックからあの小包をゆっくりと出した。

「すいません！！俺は、俺は綾坂さん宛のこの小包を盗んでしまったんです！」

俺は座布団から足を外し、土下座をする格好で、何度も何度も頭を下げた。

「そうかい、そうかい、そういう事じゃったのか」

俺は綾坂さんの意外な言葉に、土下座して頭を下げた格好で動きが止まった。そしてゆっくり頭をあげてみると、綾坂さんは小包を手に取り、それをまじまじと眺めていた。

「お主は、これがほしくて盗ったんではないのじゃろ？」

「え？」

「その証拠にじゃ、開けた痕が見えない」

確かに、俺はその綾坂さんの小包を選別して取ったのではない。それは誰の物でも良かったのだ。それに綾坂さんの言う通り、一度も開ける事なくに机の引き出しにしまっていた。誰にもバレずに家に持ち帰る事が出来た事。その時の俺は、それが証明されただけで満足だった。しかし、なぜ今の今まで捨てる事なく取っておいたのだろつか。むしろ、持っている方がいつか見つかってしまいそうな気もする。その事を自問した所で、はつきりとした答えを出す自信がない。

なぜだろう・・・。

「お主は、この中身がなんなのかさえも分からなかったんじゃないかのー？」

「はい・・・綾坂さんにとって、きっと大事な物だったに違いないのに、僕は・・・そんな事も考えずに・・・」

俺は綾坂さんの顔を見る所か、視界に入る事さえ拒んだ。

「そうじゃないんじゃ、お主はこれを取ってしまった事を後悔する気持ちは何処かにあったからこそ今まで開ける事なく取っておいたんじゃないかのー？」

「自分でもよく分かりません。ただ、その時盗んでしまったのは事実です」

「届けてくれたじゃろ。今、わしの所まで届けてくれたじゃろー」

俺は顔をゆつくりとあげ、綾坂さんの顔を見た。すると綾坂さんは、俺に2回頷いた。俺はそれを見て、何も言葉が出なかった。

「わしはな、今のお主の気持ちの方が大事だと思っくんじゃよ。その

時どろだったではなくての、今、お主が謝りに来てくれた。それだけで充分なんじゃ」

「ごめんなさい・・・僕は、僕は・・・」

空は青かった。とても青かった。その青い空が、とても印象に残っている。

第26回(後書き)

第27回へ続く・・・

第27回(前書き)

第25回新風舎出版賞、最終審査落選作品(笑)

第27回

もしかしたら、あの後俺は涙を流していたのかもしれない。ついさっきの事なのに、あの後の部分だけが思い出せない。俺は帰りの電車の中、吊り革に掴まりながらさっきの事を思い出していた。俺は事実を知った綾坂さんに殴られるものだと思っていた。殴られて当然だと思っていたし、殴られる覚悟も出来ていた。なのに綾坂さんは怒りもしなかった。それ所か今の自分を認めてくれさえた。何度謝つても、許されることじゃないのに。もし立場が逆だったら、俺は果たしてそいつを許す事が出来ただろうか……。俺の脳裏にふと、あの事件が浮かんだ。

電車は行きとは違い、学生達の帰りの時間と重なってか、座席が埋まる程混んでいた。やがて電車は次の駅に停車し、降りる人もいれば、乗る人もいた。するとその乗る人の中に、一人のおばあさんがいた。そのおばあさんは俺の背後から座席の所まで歩いて行った。おばあさんは明らかに空いている座席を探す動作をしたが、やがてそれが無い事が分かり諦めたのか、座席の一番端の手すりに掴まり、そこに落ち着いた。俺はそのおばあさんを気にしながら、誰かが席を譲るのだろうと思つて様子を伺っていたが、誰一人譲ろうとしない。友人通して雑談する者、本を読んでいる者、携帯をいじっている者、ヘッドホンで曲を聴いている者、そしてそしらぬ顔をしている者。みんなおばあさんの存在に気付かないはずはないのに……。俺はなぜかその状況にハツとした。前にも同じ事があつたようだな。なんだろう、この感じは……

「結、クイズやろうか？」

「クイズ？うん、いいよ！」

親父と一緒に湯船につきりながら、当時、小学2年の俺に、親父はそう言った。

「電車に人がいっぱい乗っていました。いっぱい居たので、もう座る席は空いていません。そこに、杖をついたおじいさんが乗ってきました。でも、みんなそのおじいさんに席を譲ってあげませんでした。なぜでしょう？」

「えー」

俺はなんでだろうと頭をかしげ、そのクイズを真剣に考えた。

「なんでだと思っ？」

そんな俺に、親父はもう一度聞いてきた。

「うーん、みんなイジワルなのかな」

「ブツブツ。ハズレです」

「えっ、じゃあ、こたえはなに？」

「答えはねー、今はまだ教えない！結がねー、もっと大きくなったら分かるかもしれないな」

「えー、そんなのずるいよー」

親父はそんな俺に微笑んでいた。

「もし、その時、結が電車に乗ってたらどうした？」

「ボク？ボクだったらおじいさんにせきをゆずってあげるよ！」

「そっか、結は優しいな」

そう言っつて親父は俺の頭を撫でた。

「よし、あと10数えたら出よっか？」

「うん！」

そうだ！あの時、親父が出したクイズの状況と一緒に！一体あの時、親父はなぜ小学2年の俺にあんなクイズを出したのだろう。いや、今考えれば、あれはクイズではなく、心理テストのような気がする。

第27回(後書き)

第28回へ続く・・・

第28回(前書き)

第25回新風舎出版賞、最終審査落選作品(笑)

第28回

俺は電車内を見渡した。

でも、親父はあれで何が言いたかったのだろう。答えを教えなくていれば何を伝えたかったのが分かったのに。『俺がもつと大きくなったら分かる』？周りの人が見て見ないフリをしているとしたか考えられないじゃないか。

俺はもう一度辺りを見渡した。

いや、待てよ。こうは考えられないだろうか。席を譲らないという考えは、こちらの一方的な考えで、譲らないんじゃないかと譲れないんだとしたらどうだろう。例えば、一見健康そうに見えて、実は足が悪かったり、例えば、その時たまたま腹痛だったとしたら。そうか！そうだよ。答えはそれだったのか！親父が言いたかったのは、一方的な考えだけじゃなく、もう一方の考え方を持てるようになるかと言いたかったんだ。親父の『俺がもつと大きくなったら分かる』っていうのは、俺がそんな風な考え方が出来るような大人、すなわち、俺がその答えが分かった時、俺は大人に成長しているっていう事だったんだ！

『そっか、結は優しいな』

頭を撫でられながら、あの時嬉しかったその言葉を頭の中で呟きながら、俺はあの時よりももつと昔の記憶を思い出していた。

「おとうさん！セミくんがアリくんにつかまってるよ。たすけてあげなきゃ！」

当時、幼稚園児の俺は、家の庭先で親父に慌ててそう言った。

「あ、結、いいから、そのままにしておいていいだよ」

「なんで？セミくんがこまってるんだよ」

俺は親父の言っている意味が分からず、そう聞き返した。

「うん。でも、セミくんを助けると、今度はアリくんが困るだろ」

「.....」

そんな事を考えもしなかった俺は、それを聞いて、とてもシヨックだったのを覚えている。

「じゃー、ボクがアrikunにおサトウをあげるよ。そうすればセミくんをたすけてもいいよね！」

「.....そ、そうだね。結は優しいな。その優しい心を、いつまでも忘れないでくれよ」

あの時の事も、そうだったんでしょ？俺は蝉の事だけしか考えていなくて、蟻が困るなんて考えもなかった。今、分かったよ。親父が俺に伝えたい事は、それだったんだって.....。

『その優しい心を、いつまでも忘れないでくれよ』

ごめん、俺忘れかけてたよ。でも分かったんだ、やっと気付いたんだ。もう、忘れないから.....。

第28回(後書き)

第29回へ続く・・・

第29回(前書き)

第25回新風舎出版賞、最終審査落選作品(笑)

第29回

10月、辺りは涼しさを増し、秋を迎えるこの季節、10月の3連休を利用して、久しぶりに親父が家に帰ってきた。夕食も食べ終え、時刻は21時を廻っていた。

こうして親父と一緒に風呂に入るのもいつ以来になるのだろうか。あえてそれは口にしなかったが、親父が座りながら頭を洗う姿を横目に、俺は湯船につかりながらそんな事を考えていた。

「背中を流してやるよ」と誘ったのは俺の方だった。親父は少し驚いていたようだったが、直ぐに誘いにつてくれた。お袋は、「母さんも混ぜてー」と冗談を言っていたが、何かとても楽しそうだった。

一つ言えるのは、親父の事を、まだ『お父さん』と読んでいた頃だという事だろう。

「親父？」

「ん!？」

親父は、シャンプーで目が開けられず、俺の声を頼りにキョロキョロと俺の存在を探していた。

「あのさー．．．」

「あー、ちよつと待て、今流すから．．．」

親父は、手探りでシャワーの蛇口を探していた。

「そのままでもいいんだ!」

親父は、蛇口を手にしたまま動きを止めた。

「親父．．．親父が昔、俺と一緒に風呂に入りながら俺にクイズ出したの覚えてる？」

「．．．クイズ?え、あ、あー。そうだな、出したかもな．．．」

親父はわざと覚えていないフリをしているのは直ぐに分かった。態度もそうだし、何より親父は責任感が強い人だという事を知っているからだ。

「譲れなかったんだよね．．．譲らないんじゃないよ。その人達は足が悪かったり、腹痛だったりで、譲りたくても譲れなかったんだよね．．．こんな答えで．．．いいのかな？．．．」

親父は目をつぶったまま、小さく、小さく頷いてくれた．．．

第29回(後書き)

第30回へ続く・・・

第30回(前書き)

第25回新風舎出版賞、最終選考落選作品(笑)

第30回

11月、木々は姿を変え、日も大分短くなってきたこの季節、俺は毎日のように自動車教習所に通っていた。仮免許も早々に取得し、路上に出での教習も、自信さえ付いてきた。こうして毎日通っているのも、運転する事が好きなのもそうであると同時に、『免許所得』という名の目指す所があるからだろう。通えば通う程、自分に身に付いていくのがとても嬉しかった。

12月、空気の一変を肌で感じ、それに応じて人々の装いも変わるこの季節、俺は運転免許センターの試験の合否を知らせる電光掲示板の前に立っていた。こうして掲示板の前に立ち、ただ上を見上げる自分の姿に、いつかの自分を思い出させた。

合格発表を知らせる仕組みは、合格している者の番号だけが光り、落ちている者の番号は光らないという分かりやすいものであるようだった。

そしてその時間がきたのか、周りの人達が慌ただしくなってきた。お袋が俺に自動車運転免許を勧めたのは、今なら分かるような気がする……

掲示板の数字は、1番から順に、合格している者の番号だけが光り始め、点灯している番号と、真っ暗な番号とに分かれ始めた。

あの時は、お袋が遠回しに俺に就職しろという威圧にしか思えなかった……

俺の番号は『413番』。順番に光っていくスピードは意外に早く、そのテンポが俺を焦らせた。

だけど今の俺には分かる……
そしてあっという間に光りのスピードは400番台まで一気にやってくる。

大学受験に失敗した俺に、何か目標を持たせたかったんだろうっ

て．．．

400番、405番、406番と、光り始める。409、411
．．『413』、

確かに今、『413』という数字が電光掲示板に点灯している。

やった．．．やった．．．よし！！

俺は唇を噛み締め、右手を握りしめると、小さくガッツポーズをした。

俺の中に、何かが入み上げてくるのが分かった。それは、達成感と満足感なんだろう。その感情も、お袋が俺に持たせたかったものに違いない。そしてその気持ちを、素直に受け止められる自分がいた．．．。

第30回(後書き)

第31回へ続く・・・

第31回(前書き)

第25回新風舎出版賞、最終審査落選作品(笑)

第31回

数日後の日曜日、俺は免許証を手に、青山さんの家に自転車で向かった。もちろん、運転免許を取ったのだから家の車で行く事も考えたが、あえて自転車で行く事を選んだ。あれから青山さん夫妻とはメールでやり取りをしていたという事もあり、今日行く事は、事前にメールで青山さん夫妻と連絡をとっていた。青山さんは既に退院しており、一度家には行きたいと思っていたが、俺はどうしても免許取得後にしたかった。

自転車で駆け抜ける12月の風はとても冷たかった。あの汗をかきながら疾走して日が懐かしく感じられた。

青山さんの家には13時に行く事になっていたが、その5分前には到着した。そして自転車をあの白い柵の前に置き、インターホンを鳴らした。すると玄関の扉が開き、突然、中から小さい男の子が俺の方に駆けて来た。

「ゆいおにいちゃん？ボクね、5さいだよ」

俺は、俺のズボンを両手で掴みながら俺の顔を見上げているこの小さな男の子にあっけにとられていると、玄関から青山夫妻が出て来たのが目に入った。

「あゝ、結くんゴメンなさいね」

そう言いながら駆けてくる奥さんを見て、青山さんの家の中に貼ってあった一枚の絵を思い出した。

「あつ、あつ君？青山あつ君だよ」

そう言っ下を見ると、その男の子は不思議な物でも見るように俺の顔をじっと見ている。

「あつ君ですよー？・・・」

今度は奥さんの方に顔を向けると、奥さんもこの子と同じような顔で俺を見ていた。

「あつ君・・・」

更に助けを求めるかのように、青山さんの方にも顔を向けるが、青山さんも同じような顔で、それ所か動きさえ止まっていた。

第31回(後書き)

第32回へ続く・・・

第32回(前書き)

第25回新風舎出版賞、最終審査落選作品(笑)

第32回

「ハハハハハハハハ！そういう事だったのー！？」

奥さんの大きな笑い声が、家中に響き渡った。

「言われてみれば、『あつ』にも読めるわね」

奥さんはあの絵を眺めながらそう言った。

「ほら、お兄ちゃんに教えてあげなさいっ」

奥さんはその男の子を俺の前に近寄らせた。

「うん、ボクささいだよ」

「ハハ」

俺は小さく笑った。

「お名前は？」

奥さんはその男の子の肩に手を乗せた。

「お名前は、ようくんだよ」

『青山よう』、正確には『青山陽』そう、あれは『あつ』ではなく、『よう』だったのだ。あまりにも字がちやごちやしていた為、

『あつ』だとばかり思い込んでいた。

「さつきは結くんどうしちゃったのかと思ったわよー。あつ君、あつ君で聞いた事もない名前言うから」

「いやいや」

俺は照れながら青山さんの方を見ると、青山さんはソファーに座りながら、笑いながら頷いてくれていた。青山さんは、あの時包帯が巻かれていたのが嘘のように、元気になっていた。怪我の後遺症はなく、事件前と変わらぬ日々を取り戻したらしい。俺はそれが聞けて、とても安心した。

第32回(後書き)

第33回へ続く・・・

第33回(前書き)

第25回新風舎出版賞、最終審査落選作品(笑)

第33回

「あの、俺免許取ったんです」

俺はズボンのポケットを探った。

「あら、そうなの？早く言ってくれなきゃ」

「これ．．．顔が凄い疲れてますけど．．．」

俺は奥さんに免許証を渡した。

「あら、よく撮れてるじゃない」

そう言つて奥さんは免許証を青山さんに渡した。

俺は免許証をじっくり見ている青山さんを見つめ、ゆっくりと口を開いた。

「．．．俺、青山さん達に逢えて、本当に良かったって思うんです．．．今日は、免許が取れたっていう事よりも、それ、そのお礼が言いたくて．．．なんかうまく言えないけど、俺が変われたキツカケつて言うか、なんていうか．．．」

「結くんの言いたい事は充分に分かるよ。君はもう、あの頃の君じゃないし、立派な人間に変わったよ」

俺は顔を上げられなかったが、下を向いたまま、黙って聞いていた。

「それに、私達だって、君に出逢えて本当に良かったって思ってるよ。な？」

青山さんのその意外な言葉に、俺は思わず顔を上げた。

「そうよ、結くんだって、私達の色んなキツカケになったわよ」
「．．．」

俺はそのような事を一度も言われた事はなかった。今まで自分の存在や生きている価値さえないと思っていた。なのに、今こうして俺は誰かの何かしらのキツカケになつている。俺はその言葉に多少の違和感を覚えつつも、それを素直に受け入れた。

「ねー、ゆいおにいちゃん、遊ぼうよー」

小さな陽くんは、俺のズボンの膝の部分を掴んで揺らしながらそう言った。

陽くんは俺とは初対面なのに、とても人なつっこい子供だった。しかしその無邪気さが可愛らしく、とても癒された。

「あ、そうそう、お外で写真でも撮りましようよ」

そう言う奥さんを見て、そう言えばこの人の子だったと、一人で納得した。

「どうかした？」

「いや・・・陽くん可愛いですね」

「そうよー、親バカかもしれないけど、うちの子が一番可愛いわよー。幼稚園で他の子を見ても陽より可愛い子はいないわよね・・・それに、『陽』って名前もいいでしょ？」

「そうですね」

「『陽』って名前は私が付けたんだよ。明るい子に育ててほしいってね」

青山さんが、俺にそう言った。

「『結』くんも、いい名前だね。ご両親に名前の由来は聞いた事はあるのかな？」

奥さんにふいにそう言われ、俺は考えた。そう言えば、そんな事は一度も考えた事もなかったし、誰が付けたのかさえ知らない。

「いえ・・・」

「それじゃー、一度、ご両親に聞いてみるといい。いい名前だから、ちゃんとした理由があると思うよ」

青山さんのその言葉に、俺は少し考えさせられた。

「じゃー、撮りますよー」

青山さん一家と俺は外に出て、奥さんが外を歩いていた男の人に撮影を頼むと、4人は青山さんの家の前に並んだ。

「はい、チーズ」

第33回(後書き)

第34回へ続く・・・

第34回(前書き)

第25回新風舎出版賞、最終審査落選作品(笑)

第34回

今年も残す所後数日という事もあって、街は独特な雰囲気になっていた。あの時は、もう一度この街に訪れようとは想像していなかった。そしてこの店も……。

俺は店の扉を開けると、カウンターで新聞を広げ、タバコを吸っていたおじさんが慌ててタバコの火を消し、「いらっしやい……」と作り笑顔を俺に見せた。

「ごめんなさいねー」

店のおばさんがおじさんの態度を俺に謝った。俺は、あの時と全く一緒の2人の態度に、思わず吹き出してしまった。

全く変わってない。昼時なのに、お客が独りも居ないなんて。俺はそれが逆に嬉しかった。

「あら、確か前に一度来た事あったわよね？」

俺はそのおばさんの言葉に驚いた。あれは確か今年の4月の話で、もう8ヶ月は経つからだ。なのにおばさんは俺の事をなんとなく覚えてくれているらしい。いや、それ程お客が少ない為、覚えていられるんだろぅと考え直し、またおかしくなった。

「はい、大分前に……。また、来ました。あー、肉野菜炒め定食を下さい」

俺はあえてまた同じ物を頼んだ。それは、あの時特別うまかったからではなく、なんとなくあの時と同じ物を食べたかったからだ。

少しすると、厨房から野菜を炒める音が聴こえてきた。

「そのこの学生さんかい？」

野菜を炒めながら、おじさんがふいにそう聞いてきた。全くあの時と同じ質問。どうやらおじさんは俺の事を覚えてはいないらしい。俺はその質問にどう返そうか少し迷った後、こう言った。

「再来年、そうなります」

「……あー、そうかい」

俺はその答えで納得してくれるのか不安だったが、おじさんはあの時と同じように、それ以上問いただしてくる事はなかった。

俺は来年、正確には再来年、再び大学受験に望むつもりだ。親にもその意思は伝えてある。2人とも答えは同じようなニュアンスだった。「頑張れ」と。

再び大学受験に望むキツカケは、青山さんだった。青山さんはあの事件後、怪我を理由にリストラされたいらしい。そして怪我が完治した今現在、再就職の為、毎日就職活動を続けているらしいというのを知ったからだ。しかしその話を聞いたのは、奥さんの方からだった……。奥さんが言うには、家族の為もそうだが、あの頃の自分を取り戻したいと青山さんは言っていたらしい。俺はその話を聞いて、事件前の自分を取り戻す為に必死に頑張っている青山さんを自分に繋げた。俺はあの事件以来、大学受験に失敗した事をあいつらだけのせいにし、復讐心に燃え、更には腐り、もう一度チャレンジしてみようと思った事は一度もなかった。俺には青山さんのように守るべきものがないというのは理由にはならない。俺はそう気付かされ、またチャレンジしてみようと思いたった。

第34回(後書き)

第35回へ続く・・・

第35回(前書き)

第25回新風舎出版賞、最終審査落選作品(笑)

第35回

1月、年が明け、人それぞれ新しい年に思いをよせるこの季節、俺は、あのガソリンスタンドに居た。といってもお客としてではなく、そのアルバイトの一人としてだ。このアルバイトが大変なのは、端からみても分かっていた。しかしなぜこのアルバイトをしてみようと思ったのは、自分のこの内向的な性格を変えたかったからもある。入ってまだ数日だが、大変さは元より、とてもやりがいのある仕事だと気付いた。

「いらっしやいませー！」

「お兄さん元気いいねー」

「ありがとうございます」

こうしてお客さんに言われる事が、とても嬉しく感じた。

青山さんの奥さんと一緒に来た時に担当したあの若い男はというと、俺と同年の大学生だという事が話してみ分かった。同い年という事や、俺の目指す大学の学生という事もあり、とても話が合った。

免許を取り、自分で車を運転するようになってから気付いた事だが、ガソリンをカラの状態から満タンに入れると、およそ40リットル入る。しかし、あの時、奥さんは、満タンに入れても8リットルしか入らなかつた。これは俺の憶測だが、もしかしたら、奥さんはこのガソリンスタンドの雰囲気や俺に見せる為にガソリンを入れる必要もないにも関わらず、あえてガソリンを入れに来たのではないかという事だ。もしそれが真実で、奥さんの俺に対する優しい気持ちならば、俺はその行為をととても感謝したい。

第35回(後書き)

第36回へ続く・・・

第36回(前書き)

第25回新風舎出版賞、最終審査落選作品(笑)

第36回

今日は俺の成人式だ。俺は着慣れないスーツにネクタイという格好で、会場に大勢居る同じ年代の一人として座っていた。式典では市長のスピーチが続ぎ、数分後、それに嫌気をさしたのである。数人が舞台上がり込み、暴れ回っていた。するとほぼそれと同時に係りの人達数人が、それを止めに舞台上がった。その機敏さからすると、恐らくそうなる事を想定していたのであろう。それにしても、こういう奴らがいると、市長も大変だよな。。。。そう思ってから、自分が市長側に立ってものを言っている事に気がついて驚いた。なぜだろう。とても不思議だった。ふと外の方を見ると、白い雪が遙か上空から降り始めていた。

第36回(後書き)

第37回へ続く・・・

第37回(前書き)

第25回新風舎出版賞、最終審査落選作品(笑)

第37回

成人式も終わり、自分の部屋で今日の成人式の各地の様子のニュースを見ていた。どうやら各地でも暴れ回る同年代の様々な問題があつたらしい。俺は複雑な思いでその映像を見ていたが、やがて成人式のニュースも終わり、次の話題に切り替わると、俺はリモコンでテレビの電源を消した。するとテレビ画面が暗くなり、その画面のガラスに反射し、自分の顔がうつすらと写し出された。その自分の顔を見て、去年と同じように、こうして自分の顔を見た、ふとその時思った。あれから一年、俺はいい顔になっているのだろうか。俺は立ち上がり、机の引き出しに閉まつておいた、青山さんの家の前で撮った4人の写真を出し、改めて自分の顔を見た……。

『大人ってなんだろう』 去年、そんな事も考えたような気がする。
『大人ってなんだろう』 俺は再び今の20歳になつた自分に自問した。

それはこの一年間の様々な経験の中に答えがあると思う。思い返せばこの一年間で様々な人に出逢つた。そしてその人達に色々なものを与えられ、学び、考え、迷い、そして自分を見つめ直し、更には自分の人生を大きく変えた。人生は何が起こるか分からないし、その日一日、一日を大事にしなければいけないというのもその内の一つだ。もしかしたら、その経験の積み重ねが、大人になる為の要素なのかもしれない。俺はそこまで考えた後、あえて明確な答えを言葉にして現そうとするのは止める事にした。自分はまだまだ成長過程にあり、その答えを出す立場の人間ではないと思うからだ。ただ一つ言える事は、人間はその人が育つた環境や、どんな人と出逢つてきたかによって大分変わるといふ事だろう。ふと、あの事件の2人の顔が浮かんだ。いや、正確には浮かんではいない。それ所か、もう既に奴らの顔は憶えていないと言つた方がいいのかもしれない。仮に街で奴らが俺の前に現れたとしても、俺は気付かないだろう。

それは、それ程月日が経ったという事を暗示しているのだろう。あの当時は、奴らを見つけ出し、殺す事だけを考えていた。しかし今は復讐するというよりも、なぜ自分をやったのか、そして今はどう思っているのかを聞きたいという気持ちに変わってきている。もちろん、それは奴らを許すという事でも、時の流れがそうさせた訳では決してなく、俺のそれからの経験によつての気持ちの変化がそうさせたのだろう。そしてもしも奴らが今は更生し、あの事件を反省しているのだとしたら、はたして俺は奴らを許せる事が出来るだろうか。もちろん、直接奴らに会つて話をして見ない事にはそれは分からないが。そして青山さんの言った言葉も思い出す。『あの事件で得たものもある』という言葉。俺は大げさな話、奴らにやられたおかげで今の自分がいると思えるようになった。その為に沢山の人達に出逢えたのは事実なことであるから。少なくとも、そんな風に前向きに思えるようになったのは事実だろう。俺は、ふとそんな事を思った。

第37回(後書き)

第38回へ続く・・・

第38回(前書き)

第25回新風舎出版賞、最終審査落選作品(笑)

第38回

「結、ごはん」

部屋の扉を隔て、お袋の声が聞こえた。

「今行くよ」

部屋を出て、階段を下りていると、ふと、青山さん夫妻の言葉が脳裏に浮かんだ。

『ご両親に名前の由来は聞いた事はあるのかな？』

『一度、ご両親に聞いてみるといい。いい名前だから、ちゃんとした理由があると思うよ』

一階に下りると、お袋が茶碗にご飯をよそっている所だった。

「あのさー、俺の名前って誰がつけたの？」

俺は多少照れながらもそう言っていると、お袋はご飯を俺の茶碗により終えた所で手を止めた。

「あれ？言っただけじゃなかったの？．．．私が付けたのよ」

そうさらっと言っていると、お袋は俺の席に茶碗を置いた。

「え？理由は？」

「．．．聞いちゃう？」

お袋は俺の方を向き、イタズラっぽくそう言った。

「．．．」

俺はあえて何も言わず、お袋の言葉を待った。

「．．．結の名前の由来はねー．．．母さんと、お父さんが．．．

結ばれて出来た子だからよって、ちょっとそんな事言わせないでよ、もー」

お袋はそう言って俺の肩を叩いた。

「お父さんもそれに『いい名前だ』って賛成してくれてね、それで．

．．．」

あまりにもどうしようもない自分の名前の由来に、照れながらも聞いて損をしたような気がした．．．。

第38回(後書き)

次回、最終回です。

最終回（前書き）

第25回新風舎出版賞、最終選考作品

最終回

「優風、クイズやるっか？」

5才になる娘の優風と湯船に浸かりながら、私は優風にそう言った。

「クイズ？どんなの？」

「ある時、電車に人が沢山乗っていました。その為、席は空いていません。次の駅に着くと、一人の杖をついたおじいさんが乗ってきました。おじいさんは席に座りたかったのですが、誰も席を譲ってあげませんでした。なぜでしょう？」

「うんとね、みんなね、じぶんがすわりたかったの」

「ブ、ハズレです」

「え？」

「正解はね、優風がもっと大きくなったらお父さんにまた教えてね」
「うん。わかった」

いつかこの子が大きくなって、私にその答えを言いにくるその時を、私は心待ちにしようと思う。そして自分の名前の由来を私や妻に聞きにくる事を、これからの生きがいにしようと思う。私が今まで色んな人に与えられた優しさや思いやりや言葉を今度はこの子に与える事が、大人として、そして親としての使命なのではないかと私には分かるから。それが答えだって、今、大人になり、そして親となった今の私には、それが、分かるから……。

最終回（後書き）

以上で、「優しい風が吹く季節に」は完結となります。今までお読みになって下さった方々、どうもありがとうございました。この作品には、自分の伝えたいことが全て詰まっているので、とても思い入れがあります。ご意見ご感想を下されると嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0502k/>

優しい風が吹く季節に

2010年10月8日14時52分発行